

黒松が見ていた開拓物語 ―旧荻小築山の黒松の由来

荻伏小学校は、昭和四十五年の春まで、荻伏生活改善センターと給食センターの間に建っていた。コンクリートの正門は今も残っており、そこに小学校のあったことを語っている。その正門の前に立つと、築山に三本の木が植えられているのが目に入る。かつては木造校舎の正面を飾り、あるときには生徒たちの写生の対象となり、またあるときには木登りや遊びの相手ともなった木である。一番高いのが黒松、その左にあるのが、元浦河教会青年会と小川秀一牧師が平和を願って植えたという神樹（ニワウルシ）、そして右側が同校の秦（はた）幸治先生が自宅から移植された御柳（ギョリュウ）である。植えられたのは昭和十年前後とみられるが、築山の中心である黒松には、寄贈された三石町梟舞（けりまい）佐々木小次郎の家のこんな歴史が秘められていた。

佐々木家の郷里は、青森県三戸郡平良崎村字玉掛である。農地に限りのあるその地方では、農家の次男、三男ともなると、他に移住して生活の道を求めなければならなかった。明治二十四年、佐々木小次郎の父勇八は、国の施策であった北海道開拓団に応募した。父母と二人の兄、三歳の小次郎一家五人は親戚の四家族とともに、北海道へ渡ることになった。

当時陸路交通はなく、危険の多い海路が唯一の交通路である。小さな帆船での航海は死と隣りあわせの難行だった。郷里を離れるときに持って出た荷物といえば、背負子（しょいこ）に背負えるだけの、わずかの身の回り品と何がしかの食料品だけ。着たきり雀同然で開拓に向かうのは、並々ならぬ固い決意が必要であった。それをあらわすかのように、狭い船の中に、郷里から大切に持ち込まれたものがあつた。それは二本の黒松の若木だった。樹木の中でも松は地質を嫌わず、海岸の砂地や塩風にも耐える丈夫な木とされている。新地、しかも寒冷地での開墾には、一にも二にも、何物にも屈しない松の木のような強いねばりと生命力が必要である。自分たちも松の木のように生きたい、この松とともに生きようと励みに持って来たのだった。

船は函館を経由して浦河に着いた。上陸した一行は、道なき海岸ぞいを苦労して歩きつづけ、梟舞（けりまい）村川尻を永住の地と決めた。郷里から持ってきた黒松の若木は、村が一望できる山の峰に植えられた。そこは風当たりが強く、割り当てられた土地の中で最も条件の悪い場所だった。あえてそこに植え、松とともに生死をかけて頑張ってみようというのだった。

その後、黒松は完全に根付き順調に成育を続けた。しかし笹やぶの開墾は予想以上に厳しかった。くじけそうになるたびに、しっかりと根をはり成長をしていく黒松を見あげた。松だってこらえてるんだと、幾度となく励まされ、また開墾に精をだした。

それから幾年月……。松の木は大木に成長し、まわりにたくさんの子孫をまき散らした。しかし機械器具の入手困難な時代では、山地の開拓は困難を極めた。小次郎の代になっても、不毛に近い土地には適した作物がなく、半農半魚の寒村生活をおくっていた。小次郎には四人の子どもがいて、梟舞（けりまい）の尋常小学校に通っていたが、そこには高等科がなかった。子どもには出来るかぎりの教育を受けさせたいと、小次郎は区域の違う荻伏小学校へ頼みに行き、入学を受け入れてもらった。子どもたちは梟舞（けりまい）の尋常科を終えると荻伏の高等科へ通ったが、一番下の娘君子が入学することになったとき、小次郎は四人の子が高等科で世話になったお礼にと、あの黒松の子で枝振り

良く成長した松の木を寄付することにした。故郷への思い、開拓に向かう決意、つらかった開墾への励まし、それらが秘められたあの黒松の子を……。

寄付の申し出を受けた荻伏小学校では、竹内鼎（たけのうちかなえ）校長が馬車でもらい受けに行き、正面玄関前の築山（つきやま）にそれを植えた。うまく根づくよう、根もとには三升もの酒をふるまい、成長を祈った。それが、現在荻伏青少年広場に柵で囲まれて立っている黒松である。小学校の校舎は移転してしまい、子どもたちが枝にぶらさがったり、ぶつかったりすることもなくなって、淋しそうに枝をかしげている。

佐々木家はその後、あとを継いだ長男夫婦が亡くなるなどの不運が続き、昭和四十年山林を手放して鳧舞（けりまい）から離れた。山林の買主には松の木の由来を話し、永久保存を依頼したという。

黒松は百年を超える樹齢を重ね、今も三石温泉北側の山で健在である。

[文責 小野寺]

【話者】

竹内 鼎 浦河町東栄 明治二十八年生まれ（平成三年三月没）
佐々木栄次郎 室蘭市鷺別 大正元年生まれ